

## 古代の辺要国と四天王法

三 上 喜 孝

【キーワード】 道伝遺跡 木簡 四天王法 王土思想

### 一 山形県川西町道伝遺跡出土木簡の再検討

一九七九年に川西町教育委員会によって調査が行われた山形県川西町道伝遺跡は、古代（奈良く平安時代）の出羽国置賜郡の郡家に関連する遺跡としてよく知られている<sup>①</sup>。大小二二棟の掘立柱建物跡を含む一〇〇基以上の遺構が確認され、これらの遺構を取り囲むような形で、幅一五メートル、深さ一・五く一・八メートルの大溝が確認された。遺物の大半はこの溝から出土したもので、墨書土器を含む土器類の他、木製品として鋏、田下駄、杵、櫛、曲げ物、ザル、椀、木皿、盆、弓、鎧などが出土した。木簡五点、絵馬二点も出土している。年代は、奈良く平安時代のもものと推定された。

とりわけこの遺跡から出土した木簡は、本遺跡が置賜郡家に関わるものであることを示すきわめて興味深い内容であった。

【史料１】 道伝遺跡出土第一号木簡

〔事力〕

・寛平八年計收官物口 去七年料

〔斛力〕

本倉実五百冊口口「」×

口口官物計収如件口口

・口「」

四五〇×（二四）×七 〇一一型式

短冊形の木簡であり、ほぼ完形だが、下半部の朽損が著しい。裏面は全体に削り取られ、若干の墨痕をとどめている。寛平八年（八九六）の年紀をもつ、官物の収納額に関わる木簡である。

本木簡の内容について、平川南氏は次のように推定している<sup>②</sup>。

まず平川氏は、「計収」という言葉に注目する。「計収」とは、前年度に収納した米（これを籾振という）から目減り分を計算することといい、差し引いた量を振定<sup>③</sup>定実という。これを参考にすると、寛平八年に、前年に収納した米の目減り分の計算を行い、最終的に確定した量（「本倉実」）が五四〇斛程度だったということを、この

木簡は記していることになる。

次に注目すべきは、五四〇斛という米の量である。これについては、およそ一つの郡が一年間に納入される田租の額に相当する量と推定できるという。

以上から、この木簡が作成された背景を考えると次のようになる。前年の寛平七年に置賜郡に収納された田租を、翌年、国司と郡司との立ち合いのもとで目減り分の計算（「計収」）を行うことにより最終的な量（「本倉実」）を確定した。その一連の業務を実施したことを証明するために作成されたのがこの木簡である。この木簡は置賜郡に巡行した出羽国司によって作成され、その際に立ち合った置賜郡司に与えたものと思われる。

平川氏の分析で明らかになった一号木簡の内容は、道伝遺跡の性格を探る上で重要な意味を持つ。すなわち道伝遺跡は、九世紀後半段階において、置賜郡の郡家ないしその関連施設であった可能性が高いのである。<sup>(3)</sup>

そして一号木簡とならんで、本遺跡を大きく特徴づけていると思われるものが、次の二号木簡である。

# 【史料2】道伝遺跡出土第二号木簡

・四天王「」

合三百卅〇

観世音経一

精進経一百八

十一面陀一百十

多心経十六

涅槃経陀六十五

八名普密陀卅

・〇

五二×三四×七 〇一一型式

完形の短冊形の木簡である。木クギが上端から一三センチと二六センチの二カ所、すなわち全体を四等分した上部二カ所に残存している。この木簡が他に転用されたとは考えられないだけに、何かに打ちつけていたと判断できる。

この木簡の内容についても平川氏による分析がある。<sup>(4)</sup> 平川氏によれば、ここに書かれている経典名は、精進経を除き、正倉院文書中の「優婆塞貢進文書」に頻出しており、古代においてはよく使われていた経典であったという。そして、このような経典の列記の意味は、冒頭の「四天王」に関連すると考えられる。すなわちこの地の守護を祈願して実施された「四天王法」などの法会の際に読まれた経典を記録し、それを（柱あるいは壁などに）打ちつけたのであろう、とした。

このように平川氏は、二号木簡を「この地の守護を祈願して実施された四天王法」などの法会に関わるものとみている。実際、道伝遺跡からは、「佛」「目」「林」「二万」「三万」「七万」「達」「由」「安」「浄」「田」と書かれた墨書土器も出土しており、この地で何らかの仏教的な法会を行っていた可能性は高い。

ところで、山形県内では「四天王」と書かれた古代の文字資料がもう一点存在する。遊佐町の宮ノ下遺跡（古代では飽海郡）の調査では八く九世紀の墨書土器が多数出土したが、この中に「四天王」と書かれた墨書土器が一点出土している。本遺跡で仏教的要素を持つ墨書土器は「四天王」一点のみだが、報告書によれば、ほかに仏画を描いたような木製品が一点出土している。<sup>(5)</sup>

そこで注目したいのが、「四天王法」である。「迦要国」において

は、国家守護の目的でとりわけ「四天王法」が重要視されていたことが文献史料から知られる。本稿では、これまでの文献史料にみえる辺要国の四天王法関係史料を整理した上で、日本海を中心とした古代国家の境界意識や文化伝播の様相を考察することにした。

## 二 古代辺要国における四天王法の諸相

### I 西 海 道

古代の辺要国と四天王法との関わりでよく知られているのが、西海道の大宰府・大野城である。文献によれば宝龜五年（七七四）に創建されたという。

【史料3】『扶桑略記』宝龜五年（七七四）是歲条  
太宰府起四王院。

【史料4】『類聚三代格』卷一 宝龜五年（七七四）三月三日官符  
太政官符

応<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>造<sub>二</sub>四天王寺<sub>一</sub>埵像四軀事（各高六尺）  
右被<sub>二</sub>内大臣從二位藤原朝臣宣<sub>一</sub>倂、奉<sub>レ</sub>勅、如聞新羅兇醜不<sub>レ</sub>顧恩義、早懷<sub>二</sub>毒心<sub>一</sub>常為<sub>二</sub>咒咀<sub>一</sub>、仏神難<sub>レ</sub>誣慮或報<sub>レ</sub>応。宜<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>大宰府直<sub>一</sub>新羅国<sub>二</sub>高顯淨地<sub>一</sub>奉<sub>レ</sub>造<sub>二</sub>件像<sub>一</sub>攘<sub>中</sub>却其災<sub>上</sub>。仍請<sub>二</sub>淨行僧四口<sub>一</sub>、各当<sub>二</sub>像前<sub>一</sub>、一事以上依<sub>二</sub>最勝王經四天王護国品<sub>一</sub>、日誦<sub>二</sub>經王<sub>一</sub>、夜誦<sub>二</sub>神咒<sub>一</sub>。但春秋二時別<sub>二</sub>七日<sub>一</sub>、祇益精進依<sub>レ</sub>法修行。仍監已上一人專<sub>二</sub>当其事<sub>一</sub>。其僧別法服、麻袈裟、綖各一領、麻裳、絶綿袴各一腰、絶綿襖子衫各一領、襪非各一両、布施

絶一疋、綿三屯、布二端、供養布施並用<sub>二</sub>庫物及正税<sub>一</sub>。自今以後永為<sub>二</sub>恒例<sub>一</sub>。

宝龜五年三月三日

【史料4】には、大野城に四王院が設置された目的や、そこで行われる「四天王法」の具体的な内容が記されている。それによれば、四王院は新羅との軍事的緊張を背景に、国家鎮護を目的として設置され、そこで行われる四天王法については、僧四人が、四天王の各像の前で最勝王經四天王護国品によつて、昼は經卷を読み、夜は神咒を誦すこと、春秋の四天王修法を行うべきこと、供養の布施は大宰府の庫物ならびに正税を用いること、などが定められている。

辺要国に四天王寺を設置する背景の一つとしては、唐の影響が考えられる。『宋高僧伝』は、次のような説話を伝えている。

【史料5】『宋高僧伝』京兆大興善寺不空伝（慧朗）

又天宝中、西蕃、大石、康三国帥<sub>二</sub>兵围<sub>二</sub>西涼府<sub>一</sub>、詔空入、帝御<sub>二</sub>于道場<sub>一</sub>、空秉<sub>二</sub>香炉<sub>一</sub>、誦<sub>二</sub>任王密語<sub>一</sub>二七篇<sub>一</sub>、帝見<sub>二</sub>神兵可<sub>二</sub>五百員<sub>一</sub>在<sub>中</sub>于殿庭<sub>上</sub>、驚問<sub>二</sub>空<sub>一</sub>。空曰「毘沙門天子領<sub>二</sub>兵救<sub>二</sub>安西<sub>一</sub>、請急設<sub>二</sub>食發遣<sub>一</sub>」四月二十日果奏云「二月十一日城北三十許里、雲霧間見<sub>二</sub>神兵長偉<sub>一</sub>、鼓角諠鳴、山地崩震、蕃部驚潰。彼營壘中有<sub>二</sub>鼠金色<sub>一</sub>、咋<sub>二</sub>弓弩弦<sub>一</sub>皆絶。城北門樓有<sub>二</sub>光明天王<sub>一</sub>怒視、蕃帥大奔」帝覽奏謝<sub>二</sub>空<sub>一</sub>、因<sub>レ</sub>勅諸道城樓置<sub>二</sub>天王像<sub>一</sub>、此其始也。

これによると、唐玄宗皇帝の天宝年間（七四二～七四八年）に、

周辺の国より侵略をうけ、都が敵に囲まれたとき、玄宗皇帝が時の名僧・不空三蔵に命じて毘沙門天に祈らせると、毘沙門天の王子が鎧、児に身を固め戈をとつて兵を率いて現われ都を救い、敵の陣中においては金色の鼠が出て来て、弓の弦を皆断つたので大勝利となり、それから城には常に毘沙門天王像を祀らせた、という。辺要国の軍事施設に四天王を祀るという政策は、唐の影響を受けて、国家主導で進められたのであろう。

大野城四天王寺のその後の展開を、史料からたどつてみよう。

【史料6】『類聚国史』卷一八〇 延暦二〇年（八〇二）正月癸丑

停大宰府大野山寺行四天王法。其四天王像及堂舍法物等並遷便近寺。

大宰府大野城で行われていた四天王法を停止し、四天王像などを近くの寺（筑前国分寺）に移した。

【史料7】『類聚国史』卷一八〇 大同二年（八〇七）十二月甲寅朔

大宰府言。於大野城鼓峰、興建堂宇、安置四天王像、令僧四人如法修行。而依制旨、既從停止、其像并法物等、並遷置筑前国金光明寺畢、其堂舍等今猶存焉。而遷像以来、疫病尤甚。伏請奉遷本処者。許之。但停請僧修行。（卷一七八修法にも同様の記事あり）

大野城の鼓峰に堂を建てて四天王像を安置したが、これを筑前国分寺に移した。ところがその後疫病が甚だしくなったので、もとの場所に戻した。ただし僧侶は置かなかった。

【史料8】『類聚国史』卷一七八 大同四年（八〇九）九月乙卯復令大宰府於大野城鼓峰、行四天王法。

大野城鼓峰で四天王法が復活した。

【史料9】『日本後紀』弘仁二年（八二二）二月庚寅於大宰府鼓岑四天王寺、造釈迦仏像。

大野城の四天王寺で釈迦仏像を造った。

【史料10】平安遺文 第四九〇〇号 弘仁十一年（八二〇）三月四日大宰府牒案

府牒 觀世音寺

応四王寺悔過預彼寺講師事

牒案太政官主（去）大同四年九月十三日符、被右大臣宣稱、奉勅、令筑前国講師伝燈満位僧道証等、依旧脩行者、府依符旨、比年奉行、然今道証解任但去、仍令其替講師勤覺遵行其法、此則別国之時、国司掌城之日所行事矣、府今商量件悔過法、始去宝龜五年行之、而依太政官去延暦廿年正月廿日符停止此法、即其像移属筑前国金光明寺畢、此則府带国之日所為也、今件寺在大野城中、彼城且付府已了、然則事須停止、国講師別当府講師寺察此状、自今以後、依預掌、以牒。

弘仁十一年三月四日少典嶋田臣清田

大式安倍朝臣寛麻呂

「件公驗為本寺沙汰書移案文進上之」

大同四年以降、四天王寺の悔過法は筑前国講師の道証が行っていたが、四天王像が筑前国分寺から大野城にもどされたことにより、悔過法のとめを、大宰府の観世音寺の講師がとめるべきことを定めた。

【史料11】平安遺文 第四四九四号 太政官牒（園城寺文書）

（外題）「弘伝真言止観両宗官牒奥書親筆」

太政官牒

十禅師延暦寺伝燈大法師位円珍

牒、円珍奏状稱、円珍伏以、承和聖上登極之載、年分奉<sub>レ</sub>試、讀大毗盧遮那經<sub>一</sub>、及第蒙<sub>レ</sub>度、依<sub>レ</sub>式一紀棲山、習<sub>レ</sub>学遮那止観之宗<sub>一</sub>、而毎<sub>レ</sub>披<sub>二</sub>天台山図<sub>一</sub>、恒瞻<sub>二</sub>華頂石橋之形勝<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>遇<sub>二</sub>良縁<sub>一</sub>、久以存思、爰至<sub>二</sub>田邑聖主<sub>一</sub>、伏蒙特賜<sub>二</sub>恩許<sub>一</sub>出<sub>レ</sub>界、嘉祥四年四月十五日辞<sub>二</sub>京輦<sub>一</sub>向<sub>二</sub>大宰府<sub>一</sub>、五月廿四日得<sub>レ</sub>達<sub>二</sub>前処<sub>一</sub>、以無<sub>二</sub>便船<sub>一</sub>、暫寄<sub>二</sub>住城山四王院<sub>一</sub>、更蒙<sub>二</sub>天恩<sub>一</sub>、賜給月粮、少監正六位上藤原朝臣有蔭・筑前介正六位上紀朝臣愛宕麻呂勾<sub>二</sub>当其事<sub>一</sub>、（後略）

入唐僧・円珍は嘉祥四年（八五二）四月十五日に京を出発し、同五月二十四日に大宰府に到着したが、「便船」がなかったため、しばらくの間、「城山四王院」に寄住していたという。同様の史料は、平安遺文四四六四、四四八二号にもみえる。

【史料12】『日本三代実録』貞観八年（八六六）二月十四日条

神祇官奏言。肥後国阿蘇大神懷<sub>二</sub>藏怒氣<sub>一</sub>。由<sub>レ</sub>是、可<sub>レ</sub>發<sub>二</sub>疫癘<sub>一</sub>。憂<sub>二</sub>隣境兵<sub>上</sub>。勅、国司潔齋、至誠奉幣、并<sub>レ</sub>転<sub>二</sub>讀金剛般若經千卷、般若心經万卷<sub>一</sub>。大宰府司於<sub>二</sub>城山四王院<sub>一</sub>、転<sub>二</sub>讀金剛般若經三千卷、般若心經三万卷<sub>一</sub>、以奉<sub>レ</sub>謝<sub>二</sub>神心<sub>一</sub>消<sub>二</sub>伏兵疫<sub>一</sub>。

これによると、阿蘇大神の怒気による疫病、あるいは隣国の兵の脅威を消伏するため、城山（大野城）四王院において金剛般若經、般若心經の転讀が行われたという。

【史料13】『永昌記』天慶六年（九四三）六月十七日条

四天王寺言<sub>二</sub>上天王像振鳴<sub>一</sub>。

【史料14】『日本紀略』天慶六年（九四三）八月二日条

天皇幸<sub>二</sub>八省院<sub>一</sub>、奉<sub>二</sub>幣伊勢大神宮<sub>一</sub>。依<sub>レ</sub>祈<sub>二</sub>太宰府四王寺佛像堂舍鳴響<sub>一</sub>也。

以上の二史料は、大野城の四天王寺の仏像・堂舎における怪音の事実を伝える。

【史料15】『左経記』万寿三年（一〇二六）五月十三日条

天晴。及<sub>二</sub>午後<sub>一</sub>参<sub>二</sub>右府<sub>一</sub>。依<sub>二</sub>宇佐異事<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御祈願事之由<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>賜<sub>二</sub>太宰并五畿七道諸国官符之状、次承<sub>レ</sub>之仰<sub>二</sub>下大夫史貞行宿祢<sub>一</sub>。

【史料16】『類聚符宣抄』万寿三年五月十三日太政官符

太政官符大宰府

応<sub>レ</sub>祈<sub>レ</sub>禱<sub>レ</sub>仏神、攘<sub>レ</sub>除<sub>レ</sub>疾疫、兼<sub>レ</sub>慎<sub>レ</sub>兵革<sub>上</sub>事

右得<sub>レ</sub>彼府去三月廿三日解状<sub>二</sub>得<sub>レ</sub>管豊前国今月廿日解状<sub>一</sub>、八幡宇佐宮今月十七日移<sub>レ</sub>、西門外腋御幣殿東方柞木俄枯、一葉無<sub>レ</sub>青、今月十三日申時所見及<sub>二</sub>也<sub>一</sub>。又同月十七日辰時、鴨一隻集南楼上<sub>二</sub>者、神祇官勘申云、依<sub>二</sub>彼宮司等神事異例之崇<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>疫癘<sub>一</sub>、從<sub>レ</sub>兌坤方<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>兵革之事<sub>一</sub>、歟者。陰陽寮勘申云、柞木恠、恠所宮司中、寅子年人非<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>闕乱<sub>一</sub>、丑未人憂<sub>二</sub>病患<sub>一</sub>乎。期<sub>二</sub>恠日以後卅日内及八月節中丙丁日<sub>一</sub>也。鴨恠、天下非<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>疾疫<sub>一</sub>、坤良方国奏<sub>二</sub>兵革<sub>一</sub>哉。期<sub>二</sub>恠日以後廿日内及六月七月十一月節中庚辛日<sub>一</sub>也者。靈社示<sub>レ</sub>異、龜筮告<sub>レ</sub>凶、畏懼之至可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>慎哉。夫消<sub>二</sub>災沕於未兆<sub>一</sub>、莫<sub>レ</sub>先<sub>二</sub>仏力<sub>一</sub>。期<sub>二</sub>福祚於方来<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>神符<sub>一</sub>。右大臣宣、奉<sub>レ</sub>勅宣<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>彼府於四王院<sub>一</sub>、修善祈禱。予慎<sub>二</sub>兵革<sub>一</sub>。於管内国分寺、請<sub>レ</sub>淨行僧<sub>二</sub>三箇日間、転<sub>レ</sub>読<sub>二</sub>仁王般若經<sub>一</sub>、防<sub>二</sub>其疾疫<sub>一</sub>。兼令<sub>二</sub>宮司嚴加<sub>二</sub>煥誠<sub>一</sub>、專<sub>レ</sub>竭<sub>二</sub>如在之礼<sub>一</sub>、莫<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>違例之徴<sub>一</sub>。自余祈禱、温<sub>レ</sub>故勤修者、府宜<sub>二</sub>承知依<sub>レ</sub>宣行<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>。符到奉行。

左中弁源朝臣〔経頼〕

左大史小槻宿祢

万寿三年五月十三日

以上の二史料は、豊前国宇佐八幡宮の怪異現象に対して、大野城四天王寺において祈禱が行われたことが記されている。

以上のように大宰府大野城の四天王寺は、十一世紀初頭ごろまで確認できる。大野城には、北西方に毘沙門天、東方に持国天、南方

に増長天、西南方に広目天の地名が遺っており、おそらく四峰に設けられた堂宇にそれぞれ四天王像を各一体ずつ安置するという形態をとっていたと想定されている<sup>7)</sup>。その各堂舎に淨行僧四人が一人ずつ専当したのであろう。

## II 出羽国

次に出羽国の場合についてみてみよう。まず注目されるのは、『延喜式』主税上である。

【史料17】『延喜式』主税上

出羽国正税廿五万束。公廨卅四万束。月山大物忌神祭料二千束。文殊会料二千束。神宮寺料一千束。五大尊常燈節供料五千三百束。四天王修法僧供養并法服料二千六百八十束。健児粮料五万八千四百十二束。修理官舎料一万束。池溝料三万束。救急料八万束。国学生料二千束。

これによれば、出羽国では「四天王修法僧供養并法服料」として二千六百八十束の予算が計上されている。隣国の陸奥国にはみられないことから、出羽国ではとくに四天王法が重視されていたことがうかがえる。

【史料18】『類聚国史』卷一七一 天長七（八三〇）年正月癸卯条

出羽国駅伝奏云、鎮秋田城国司正六位上行介藤原朝臣行則今月三日酉時驟恠、今日辰刻、大地震動、響如<sub>二</sub>雷霆<sub>一</sub>。登時城郭官舎并四天王寺丈六仏像、四王堂舎等、皆悉顛倒。城内屋仆、擊死百姓十五人、支体折損之類一百余



人也。歴代以来未<sub>レ</sub>曾有<sub>レ</sub>聞。地之割辟、或処卅許丈、或処廿許丈、無<sub>レ</sub>処不<sub>レ</sub>辟。又城辺大河云<sub>三</sub>秋田河<sub>一</sub>。其水涸尽、流細如<sub>レ</sub>溝。疑是河底辟、分水漏通<sub>レ</sub>海歟。吏民騒動、未<sub>レ</sub>熟尋見。添河霸別河、兩岸各崩塞。其水汎濫、近側百姓懼<sub>レ</sub>当<sub>三</sub>暴流<sub>一</sub>。競陟<sub>下</sub>山崗<sub>一</sub>。理須<sub>下</sub>細録<sub>一</sub>損物馳牒<sub>上</sub>。而震動一時七八度、風雪相并、迄<sub>レ</sub>今不<sub>レ</sub>止、後害難<sub>レ</sub>知。官舎埋<sub>レ</sub>雪、不<sub>レ</sub>能弁録。夫辺要之固、以<sub>レ</sub>城為<sub>レ</sub>本。今已頽落、何支<sub>三</sub>非常<sub>一</sub>。仍須<sub>三</sub>差諸都援兵<sub>一</sub>、相<sub>三</sub>副見兵<sub>一</sub>備<sub>三</sub>不虞者<sub>一</sub>。臣未<sub>レ</sub>審商量、事在<sub>三</sub>意外<sub>一</sub>。仍且差<sub>三</sub>援兵五百人<sub>一</sub>配遣、准<sub>レ</sub>令馳駢言上。但損物色目細録追上。

これによれば、天長七年（八三〇）の大地震で、秋田城が倒壊し、死者一五人、負傷者一〇〇人余りが出た。その際に、城内の「四天王寺」と「四天王堂舎」が倒壊したという。これは、秋田城内に四天王寺、四天王堂舎が置かれていたことを示す初見記事である。

ここにみえる「四天王寺」と「四王堂舎」の違いは何であろうか。虎尾俊哉氏によれば、「四天王寺」には、本尊の丈六仏が安置されているが、「四王堂舎」とは、大宰府大野城の例に倣い、東西南北の要所にそれぞれ堂舎を設け、一堂に一王を安置する形をとったのではないかとしている。たしかに虎尾氏のように考えれば、この記事にみえる「四天王寺」と「四王堂舎」の違いを理解することができよう。

秋田城における四天王寺の存在は、現在京都国立博物館が所蔵している銅印「四王寺印」からも裏付けられる。この「四王寺印」は、江戸時代の寛文年間以後に京都の聖護院末の積善院に伝来し、昭和二年三月三十一日に重要文化財の指定を受けた。その後、文化庁が

購入し、昭和五四年四月一日に京都国立博物館に管理換となり、今日に至ったものである。

四王寺印はもと秋田県の四王寺に伝えられていたという。この四王寺印が積善院に移った経緯は、古四王神社の神宮寺が聖護院末（積善院は聖護院の塔頭）であることによると考えられている。

ところで現在、秋田城跡に隣接して古四王神社が鎮座している。「古四王神社」は、秋田県をはじめとして、新潟、山形、岩手、福島などの各県に分布しており、北陸地方、東北地方に独特の神社である。このなかで、秋田城跡に隣接する古四王神社がもっとも古く、総本社格といえる。

社伝によれば、崇神天皇の代に大彦命が北陸一帯に遠征し、この地に武甕槌命を祀り、齶田浦の神と称し、これに阿倍比羅夫が蝦夷を伐ったさい大彦命を合祀して古四王神となったという。つまり、古四王神社の「古四王」とは、もともと「越王」（北陸の王）のことであるというのが一般的な説明である。

だがこれについては、古四王神社の起源を天長七年（八三〇）の記事にみえる「四天王寺」「四王堂」に求める虎尾俊哉氏や瀧音能之氏<sup>⑩</sup>の見解の方が妥当であろう。つまり「古四王」とは、かつて秋田城に存在した四天王寺を起源としていたことを意味していると考えられるのである。さきの「四王寺印」が古四王神社の神宮寺に伝来していたことも、これに関係するだろう。「古四王神社」の総本社格が秋田城に存在していることは示唆的で、出羽国内における四王法が、秋田城を中心に行われていたことを示しているのかもしれない。

### Ⅲ 山 陰 道

四天王法の存在は、九世紀の山陰道諸国にもみることができる。

【史料19】『日本三代実録』貞観九年（八六七）五月廿六日条

造八幅四天王像五鋪、各一鋪下伯耆、出雲、石見、隱岐、長門等国。下知国司曰。彼国地在西極。堺近新羅。警備之謀、当異他国。宜歸命尊像、勤誠修法、調伏賊心、消却災變。仍須点圪地勢高敞險瞰賊境之道場。若素无道場、新圪善地、建立仁祠、安置尊像。請国分寺及部内練行精進僧四口、各当像前依最勝王經四天王護国品、昼転経卷、夜誦神咒。春秋二時別一七日。清淨堅固。依法薰修。

これによると、八幅の四天王像五鋪を造り、各一鋪を伯耆、出雲、石見、隱岐、長門等の国に下すという。そもそもこれらの国の地は「西極」にあり、堺は新羅と接するため、他国に増して警護の必要があるというのである。そこで四天王法を行い、「賊心」を「調伏」し、「災變」を「消却」すべきだとしている。その方法は、尊像を安置し、国分寺及び部内の練行精進僧四口を請い、各像の前に、最勝王經四天王護国品にもとづき、昼は経卷を転じ、夜は神咒を誦し、春秋二時ごとに一七日、清淨堅固にして、法によりて薰修すべきことを定めている。基本的には、大野城における「四天王法」と同様である。

【史料20】『日本三代実録』元慶二年（八七八）六月廿三日条

勅、令因幡、伯耆、出雲、隱岐、長門等国、調習人兵、修繕器械、

戒慎斥候、固護要害。災消異伏、理歸<sub>中</sub>仏神<sub>上</sub>。亦須<sub>下</sub>境内群神班<sub>レ</sub>幣、於四天王像僧前修調伏法<sub>上</sub>。以著龜告<sub>レ</sub>可有<sub>二</sub>辺警<sub>一</sub>也。

これによれば、著龜により辺要国の警固の必要性が告げられたため、因幡、伯耆、出雲、隱岐、長門等の日本海側の諸国に命じて、四天王像の前において新羅調伏の法を行わせたという。こうした「四天王法」の財源は、やはり大宰府や出羽国の場合と同様、当国の正税から捻出されていたことが、次の史料からわかる。

【史料21】『延喜式』主税上

凡伯耆国四王寺修法料稻四千四百九十束三把。用<sub>二</sub>当国正税<sub>一</sub>充<sub>レ</sub>之。  
凡出雲国四王寺春秋修法。每季七箇日供養并燈分料。四王四前。一前一日供飯料稻四把。粥料稻八分。餅餚料各稻三把。煎餚料油一合八勺。雜菓子四升。燈油二合。僧四口。一一口一日供飯料稻四把。粥餚料稻八分。塩一合二勺。芥子五勺。紫苔。大凝菜。醬。味噌。酢各一合。海藻。滑海藻各三両。大豆。小豆各五合。童子四人。一人一日飯料稻二把。塩二勺。海藻三分。年料（除春秋修法日。常燈日別二合。通計長夜短夜。所行四王供飯粥。四僧供飯海藻。滑海藻。塩。酢。童子四人飯塩海藻等。准修法日供行之。）以正税充行。若請<sub>二</sub>用国分寺僧<sub>一</sub>。除<sub>二</sub>二季<sub>一</sub>之外。供養本寺充之。

凡長門国四王寺修法料。稻四千六百六十八束四把。三百束四王燈油料。八百六十二束四把同四王修供。并四僧童子四人食料。千七百八十二束僧四口二季法服料。千七百廿四束同僧布施料。以<sub>二</sub>当国正税<sub>一</sub>充<sub>レ</sub>之。



#### IV 北 陸 道

このように九世紀以降になると、日本海側の諸国を中心に「四天王法」が行われるようになったことが確認できるが、さらに、北陸地方においても、その存在をうかがわせる興味深い資料がある。

鈴木景二氏は、金沢市の北東部にある「四王寺町」について、新羅の侵攻に備えて日本海側諸国が古代の四天王法と関係する地名であり、かつてここに古代の四天王像を祀っていた四天王寺が建てられていた可能性があると指摘している。<sup>①</sup>すでにみてきたように、平安時代には新羅の侵攻に備えて日本海側諸国で四天王像が祀られたことがわかっているが、北陸地方も例外ではなく、平安時代のこの地に、異族襲来を調伏するための四天王寺が建立されている可能性は十分考えられるというのである。

この「四王寺町」についてさらに興味深いのは、その立地である。この地は日本海や河北潟を見下ろせる尾根上に位置しており、これは貞観九年の山陰道諸国四天王寺設置命令の中に「地勢高敞にして賊境を睽瞰する道場」を選ぶべきこととする条件と一致していると鈴木氏は指摘している。大野城や秋田城の四天王寺も、見晴らしのいい高い所を選んで建立されているとも考えられるが、こうした条件がある程度守られていたことを示しているように思う。

もう一点興味深いのは、この周辺の観法寺町には、郡家神社が鎮座しており、この付近が「郡家」を思わせる行政の中心地であったらしいという点である。置賜郡家と想定される道伝遺跡などと同様、郡家に付随して四天王法が行われていた可能性も考えられる。

石川県ではこのほか、次のようなものがある<sup>②</sup>。

【史料22】 石川県小松市高堂遺跡出土木簡

「金光明最勝王經四天王護国品

(五一五) ×二八×五 ○一九型式

高堂遺跡では平安時代の建物群が確認されているが、その建物群を区画する南北溝から、多数の墨書土器などともに本木簡が発見された。高堂遺跡は古代では能美郡に属し、遺跡の周辺には石川県内でも有数の能美古墳群がある。さらに近年では、この遺跡の隣接地を「能美郡家」に比定する説もあることから、本遺跡は能美郡家に関わる何らかの施設であった可能性がある。

遺跡が、日本海に面した地域にあたることもあわせると、これもやはり、対外的脅威からの守護という意味から、この地で金光明最勝王經四天王護国品にもとづく四天王法が行われていたことを示していると考えることができる。さらに、ここでも郡家との関係が示唆されているのは興味深い。

山形県川西町道伝遺跡の「四天王」木簡、遊佐町宮ノ下遺跡出土の「四天王」銘墨書土器に端を発して諸資料を渉猟した結果、九世紀以降における「四天王法」の広まりは、出羽から、北陸、山陰道を経て、西海道に至る、日本海側諸国に確認することができた。そしてそれは、当時の国レベルだけではなく、郡レベルにまで浸透していたと考えられる。

### 三 四天王法拡大の背景

九世紀以降、日本海側を中心に四天王修法が行われた背景には、新羅を中心とする対外意識の変化があげられよう。村井章介氏によれば、九世紀以降、「国内において新羅と関係する不穏な情勢と、ケガレ意識の肥大化による境外のケガレた空間への恐怖とがあいまって、支配層のなかに新羅に対する強烈な排外意識が生まれてくる。それは奈良時代の対抗意識とは異なつて、蔑視と畏怖がないまぜになつた排斥の感情であり、それゆえ神仏の加護によつてしか脱却されえないものだつた」という。<sup>13)</sup>このことを示すのが次の史料であるが、これはこれまでみてきた四天王法に関する記事とその論理がきわめて似ていることがわかるであろう。

【史料23】『日本三代実録』貞観八年（八六六）十一月十七日条

勅曰。廼者恠異頻見。求之蒼龜。新羅賊兵常窺間隙。災変之発唯縁斯事。夫攘災未兆。遏賊將來。唯是神明之冥助。豈云人力之所爲。宜令能登。因幡。伯耆。出雲。石見。隱岐。長門。大宰等国府。班幣於邑境諸神。以祈鎮護之殊効。又如聞。所差健兒。統領選士等。苟預人流。曾無才器。徒称爪牙之備。不異螳之衛。况復可教之民。何禦非常之敵。亦夫十歩之中必有芳草。百城之内寧乏精兵。宜令同国府等勤加試練。必得其人上。

さらに、王土思想との関連で考えてみると、かつて河音能平氏は、「律令制的公地公民イデオロギー」のもとでは「アンジツヒ（即自

的）な王土思想」であつたものが、律令制支配体制の解体が進むなかで王土思想は「フユアジツヒ（対自的）」な支配思想として成熟していくことを指摘した。<sup>14)</sup>村井氏はこれを「日本の支配層が「王土」が現実には閉じた空間としての「国土」にすぎない」ことをはじめて対自的に意識した、という内容をもつもの」と理解し、これが九世紀以降にみられるとしている。最近では、こうした王土思想が桓武朝にすでにみられるという指摘もある。<sup>15)</sup>こうした王土思想の転換と、日本列島の境界意識の変化、辺要国における四天王法の重視は、一連のものと考えられることができる。

また、辺要国における四天王法が、本来は新羅の調伏を目的にしたものであつたにもかかわらず、「大同二年次は疫病、貞観一一年次の城山四王院の事例は阿蘇大神の怒気による疫病とされ、実相の軍事的な外敵に対してではなく国の縁辺から進入し中央に疫病をもたらす観念的な外敵に向けられたもの」となっている点も、観念的な外敵に対する神仏の加護が、辺要国における四天王法の特徴となつていったことを示している。

さらに、冒頭で示した道伝遺跡出土木簡にあるように、九世紀代には出羽国内の内陸部の郡家においても四天王法が行われていたと考えられることは、出羽国内の内陸部においても、九世紀以降には境界に対する観念的な意識が広まりをみせていたことがうかがえ、興味深い。今後は、「四天王法」の受容という視点からも出羽国内の城柵や郡家の機能を見直してみる必要があるのではないだろうか。

## おわりに

以上述べてきたことをまとめておきたい。

(1) 古代辺要国において四天王寺が造営されたことの意味は、本来的には、辺境鎮護のため、城（軍事施設）内に設置されるということであった。

(2) とくに南の軍事的拠点である大宰府大野城と、北の軍事的拠点である出羽国秋田城において、城の東西南北に四天王像を安置するという同様の設置形態がとられていた可能性が考えられることは、律令国家が、まずは政策的な意図をもって北と南に四天王像を安置した可能性を推測させる。文献上、秋田城四天王寺の建立年代は不明だが、大野城四王院をモデルにしたとすれば、その建立時期は大野城四王院とさほど変わらないのかもしれない。

(3) 九世紀以降、四天王法は日本海側の諸国を中心に拡大するが、この背景には、対新羅防備を観念的なものとする、境界意識の変化があるのではないか。こうした意識の変化は、郡家レベルにまで広がり、四天王法が郡家レベルで行われるようになったと考えられる。

(4) さらに出羽国では、四天王法は沿岸部のみならず内陸部へも拡大したと思われるが、このことは、出羽国内陸部においても観念的な国土境界が意識されていたことを示しているとも考えられる。

これまでの研究に屋上屋を重ねる結果となってしまうが、本稿では、かつて出土した道伝遺跡二号木簡を再検討するという意図から、古代辺要国における四天王法にあらためて注目し、諸史料を有機的に関連させる作業を試みたにすぎない。今後は、東北、とくに

出羽の城柵と四天王寺との関係について、より自覚的に追求していく必要があるだろう。また、日本海を介した、四天王法、四天王信仰の拡大といった問題についても引き続き、検討していく必要があるように思う。今更ながら、信仰の伝播ルートとしての日本海的重要性が、あらためて実感されるのである。

## 注

- (1) 道伝遺跡の調査成果については、川西町教育委員会『道伝遺跡発掘調査報告書』川西町文化財調査報告書第8集、一九八四年を参照。
- (2) 平川南「山形県道伝遺跡の木簡」注(1) 報告書所収。一号木簡の考察部分に関しては平川南『漆紙文書の研究』吉川弘文館に再録。
- (3) 道伝遺跡を九世紀段階における置賜郡家とする見解は、川崎利夫「置賜地域における郡衙の変遷について」『米沢史学』一九号、二〇〇三年などに述べられている。
- (4) 前注平川論文。『木簡研究』二、一九八〇年。
- (5) 財団法人山形県埋蔵文化財センター「宮ノ下遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第集。齋藤俊一「宮ノ下遺跡及び周辺の遺跡について」『第22回古代城柵官衙遺跡検討会資料』、一九九六年。
- (6) 大宰府四天王寺に関する近年の研究として、山村信榮「国境における古代山城と仏教」『都府楼』二五、一九九八年を参照。
- (7) 山村注(6) 論文。小田富士雄「古代の大宰府四王院」『九州史研究』御茶の水書房、一九六八年。
- (8) 虎尾俊哉「古四王神社と四天王寺・四天堂」『古代東北と律令法』吉川弘文館、一九九五年。初出は一九八九年。以下、虎尾氏の見解はこれによる。
- (9) 難波田徹「四王寺印」と印鑰祭」『学叢』三、一九八一年。

- ⑩ 瀧音能之「古四王神社の由来」『歴史手帖』一二一五、一九八四年
- ⑪ 鈴木景二「弥勒寺・四王寺・観法寺」『金沢市史 会報』三、一九九八年。
- ⑫ 戸淵幹夫「石川・高堂遺跡」『木簡研究』四、一九八二年。
- ⑬ 村井章介「王土王民思想と九世紀の転換」『思想』八四七、一九九五年。
- ⑭ 河音能平「王土思想と神仏習合」『中世封建社会の都市と農村』東京大学出版会、一九八四年。初出は一九七六年。
- ⑮ 三谷芳幸「律令国家の山野支配と王土思想」笹山晴生編『日本律令制の構造』吉川弘文館、二〇〇三年。
- ⑯ 山村注（6）論文。
- ⑰ これに関連して、太平洋側北辺の研究として、陸奥国の毘沙門天信仰についての窪田大介氏の詳細な考察がある（「鎮守府の吉祥天悔過と岩手の毘沙門天像」『歴史における史料の発見』平田耿二教授還暦記念論文集、一九九七年）。氏によると、もともと陸奥国の鎮守府においては律令国家の蝦夷政策の一環として吉祥天悔過が行われており、その本尊としてまつられていた毘沙門天像が契機となつて、岩手県内に毘沙門天信仰が広まってきたことを論証しており、興味深い。これと同様に、日本海側北辺の四天王法についても、蝦夷との関係も当然考えなければならぬであろうし、地域社会における信仰の受容形態も考えなければならぬであろう。

〔付記1〕 本稿は、平成十五年度山形大学歴史・地理・人類学研究会大会（二〇〇三年十月十七日、於山形大学）で報告した内容をもとにまとめたものである。

〔付記2〕 本稿は、平成十五年度文部科学省科学研究費若手研究（B）による研究成果の一部である。